

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.127 July, 2015

目次

- 〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉…1
- 〈CAPS 主催企画の報告〉
 - 第4回ドキュメンタリー映画上映会報告「ガザに生きる」
 - CAPS 主任研究員 田浪 亜央江 ……………2
- 〈CAPS 所蔵資料紹介〉……………3
- 〈パイロットプロジェクト紹介〉
 - 子ども観の社会的考察のための基礎研究
 - 法学部教授 湯山 トミ子 ……………4

〈書評〉

- 窪田陽一著 (写真・尾花基)『昭和の刻印—変容する景観の記憶』(柏書房、2015年)
 - 経済学部教授 挾本 佳代 ……………5
- 〈CAPS 研究員 研究内容紹介〉
 - 原爆文学と沖縄文学
 - CAPS 特別研究員 村上 陽子 ……………6
- 〈CAPS 新メンバー紹介〉……………7
- 〈アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告〉…………8

アジア太平洋研究センター (CAPS) からのお知らせ

2015 年度の企画が始まりました

アジア太平洋研究センター (CAPS) では、アジアに関わる公開講演会やワークショップ、映画上映会などさまざまな企画を実施していますが、今年度は特に、アジアの思想と文化表現に関する企画に力を入れる予定です。

5月21日、連続ドキュメンタリー映画上映会をもって、今年度の企画をスタートさせました(詳細報告は2ページ)。映画上映会は、秋にも行う予定です。

また、7月10日から12日は連続で、公開講演会とワークショップが予定されています。まず10日は、哲学者の花崎皋平を北海道からお呼びし、「共生とアイデンティティの思想」と題する講演会を行ないます。また翌11日は、花崎さんに加え、アイヌ文化紹介者の弓野恵子さん、ハンセン病療養者の聞き取りを行ってきた孫和代さんのお三方による、共生をめぐる対話というかたちでワークショップを行ないます。

また12日は、浪曲とパンソリ(朝鮮半島の伝統的な口承芸能)を組み合わせた、5人の演者の方々によるワークショップ「世界よ、この愚か者たちの声を聴け!」を開催致します。「声」と「音」から紡ぎされる民衆の記憶に耳を傾けたいと思います。

秋には沖縄の代表的な思想家／文学研究者であった岡本恵徳をめぐるワークショップの開催ほか、いくつかの企画を予定しております。

共生と ~花崎皋平氏講演会~
アイデンティティの思想

日時: 7月10日(金) 15:00~
場所: 成蹊大学5号館 101号室
参加費: 無料

花崎皋平: 1933年生まれ、哲学者。1971年まで京都大学教員。著書『アイヌ文化とアイヌの思想』、『他者性』、『北海道での社会運動とアイヌ民族運動』などがある。

講演会内容:
7月10日(金) 15:00~ (18:30終了予定)
会場: 成蹊大学5号館101号室
講演者: 花崎 皋平 (京都府出身)
司会: 田浪 亜央江 (CAPS 主任研究員)

7月11日(土) 14:00~ (18:30終了予定)
会場: 成蹊大学5号館101号室
講演者: 弓野 恵子 (アイヌ文化紹介者)
司会: 田浪 亜央江 (CAPS 主任研究員)

7月12日(日) 14:00~ (18:30終了予定)
会場: 成蹊大学6号館6階
講演者: 孫 和代 (ハンセン病療養者)
司会: 田浪 亜央江 (CAPS 主任研究員)

主催: 成蹊大学アジア太平洋研究センター
rino@cap.s.seikei.ac.jp
Tel: 0422-37-3349 Fax: 0422-37-3366
E-mail: caps@cap.s.seikei.ac.jp
HP: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/
〒208-8502 東京都世田谷区成蹊3-33-1 成蹊大学5号館101号室(成蹊大学5号館5階)

~ワークショップ~

世界よ、この愚か者たちの声を聴け!
浪曲からパンソリへ、パンソリから浪曲へ
旅するカタリ、千年さすらいかもめ組

日時: 7月12日(日)
時間: 14:00 ~ (18:30 終了予定)
※終了後、懇親会があります
場所: 成蹊大学6号館6階

〈おもひ組〉
水川幸々編……………浪曲師
安藤民子……………パンソリ ソリスト
岸村悠子……………浪曲師
藤原子……………浪曲師
尾花基……………浪曲師

〈演 目〉
ピナリ……………劇
浪曲……………会楽亭
パンソリ……………民衆歌
浪曲……………カンパリの物語

〈おもひ組 プロフィール〉
水川幸々編 (たまがわ ななみ)
横浜生まれ。1995年、浪曲(浪曲師)として玉川園芸館に入門、師の勧めにより2001年より浪曲師としても活動。さまざまな浪曲イベントをプロデュースする他、自作の浪曲曲も手掛け、他ジャンルの芸能・音楽との交流も積極的に行っている。

CAPS 主催企画の報告

第4回映画上映会報告「ガザに生きる」

アジア太平洋研究センター 主任研究員 田浪 亜央江

イスラエルによる51日間にわたるガザ大規模攻撃からおよそ一年がたつ。この一年間の中東やアラブ諸国をめぐる報道では圧倒的に「イスラーム国 (IS)」に焦点が当てられ、無期限停戦に入ってからガザの状況が、日本の一般メディアで報道されることはめっきり減った。しかしガザの封鎖は依然として続き、復興の目処は全く立たないという。

一方で上のような記述のトーンに対して、日本や欧米ではつねに批判の声がつかまとう。いわく、イスラエルの一方的なガザ攻撃ではなく、ガザのハマースがテロ攻撃を行ったことが原因である。民間人にも被害が出てしまったのは問題だが、本来の目的はテロの根を絶つことだ・等々。果たして本当にそうなのだろうか。

イメージや思い込みに基づいた議論ではなく、実際に起きたことへの認識を共有した上での議論が必要だ。というわけで、5月21日、長年パレスチナ取材してきたジャーナリストである土井敏邦氏が監督した本作の上映会が開かれた（この作品はガザの封鎖の問題や人々

の抵抗運動等も含めた5部作で構成されているものだが、今回上映されたのは2008年から2009年に起きた大規模攻撃後のガザの様子取材した「第五部 ガザ攻撃」である）。

冒頭、映画はいきなり攻撃を受けたガザの緊迫した状況、恐怖でこわばった人々の表情や負傷者が運び込まれるシーンから始まる。土井さんが実際に自身でガザ入りするのは停戦が一応止んだ直後のことだが、白燐弾がなお燃え続け、生き残った人々は瓦礫の山の上で破壊された一帯を見下ろすばかりである。所有するイチゴ農場が爆撃を受け、大損害をこうむった男性は、「一体、この畑が抵抗勢力に見えるのか!？」と怒りをぶちまける。他方、攻撃に参加したイスラエルの兵士は、「攻

撃を受ける可能性」や「テロリストの所在」などとは無関係にひたすら無差別攻撃を行ない、ガザ全体を無力化することがこの戦争の目的だったことを、顔の見えない半透明ガラスの向こう側から証言する。

かろうじて生き残った人々が、死んだ家族の写真を見せながら、爆撃のようす、瓦礫のなかから家族の遺体や遺品を捜したときの状況を淡々と語る。頭部に入った銃弾の破片を取り出すことが出来ず、激しい頭痛に苦しみながら生き続ける少女もいる。観る人を暗澹とした思いに沈ませたまま、映画は終わった。

休憩をはさみ、土井監督はいきなり会場の参加者にマイクを向けて感想を聞く、という型破りな

スタイルでトークを始めた。衝撃もあつてか口ごもる人の多いなか、土井さんはガザの状況を語り始めた。東西の幅は狭いところで4-5キロ、南北で40キロほどの地域に今では200万人とも言われる人々が住んでおり、人口密度は世界一高いとも言われる。その60から70%が難民である。周りはすべてフェンスで囲まれ、封鎖されているため、重病人をガザ

の外の病院に搬送することも出来ない。この映画撮影後、2014年にはまたもや大規模な攻撃が51日間続き、2万戸の家屋が破壊され、避難民がさらに避難民となってしまっている。

土井監督は話を続けた。私たちはパレスチナがテロを行ないイスラエルが反撃した、つまり報復の連鎖であり、どっちもどっちだ、という目でパレスチナを見る。また、メディアはパレスチナ人の被害を報道するとき、必ずイスラエルの被害にも触れ、彼らの言うところの「バランス」を取ろうとする。しかしパレスチナは、圧倒的な強者であるイスラエルに占領されており、他国の軍隊であるイスラエル軍によって、生活がコントロール



されている状況だ。テロは悪いに決まっているが、国際社会がこの問題を何の解決もせずに放置するなかで、抵抗するのが悪いとだけ言って済ませられるのだろうか。一番注意しなくてはならないのは、「構造」である。私たちは直接的な暴力がないことを「平和」と呼んでいるが、大学を卒業しても仕事がない、どんなに勉強しても将来がない、自由に留学も出来ないというふうに、占領によって若者たちが将来の夢を持つことが出来ない状況が、果たして平和だろうか。目に見える攻撃が止んでいても、今のパレスチナの状況は平和などとは程遠く、構造的な暴力にさらされていることを知って欲しい。

また土井さんは、違った文化をもち、違った言葉を持つ人々を「同じ人間」として受け止められる感性を持っていることこそが「国際人」の資質であると指摘した。「あなた方は将来の夢をいろいろと描ける。しかし彼らはその権利を奪われている。(映画に出てきた) バッサーム、アマルが抱えている問題を心で受け止めて欲しい」。そしてジャーナリストとしての自分の役割は、そうした状況を想像出来る材料を、直接現地には行けない人たちに向けて差し出すことだ、と述べた。

土井監督は子どものとき、アフリカで医療支援に従事したシュバイツァーに憧れ、実は医者になりたかったという。しかしそれがかなわず、自分の道を見出すために世界を放浪していたときに出会ったのがイスラエルのキブツ（集団農場）で働いていた青年だった。土井監督もイスラエルに向かいキブツに滞在し、イスラエルが大好きになったが、たまたま人に連れられて初めてガザに入り、難民キャンプの状況を目にした。その衝撃が、ジャーナリストとしての人生を決めたのだった。

シオニズムの起源に始まる「パレスチナ問題」の歴史的背景を説明し、パレスチナとイスラエルだけではなく、国連、英国、アメリカ等さまざまなアクターの立場や問題を考える。例えばパレスチナ問題に関する一般的な講義がそうしたものであるのに対し、土井監督のお話は、自身の生き方を示しつつ、自分の問題や生き方として「パレスチナ（それは地域としてのパレスチナに限定されない）」を考えて欲しい、と聴き手に訴えるものであった。私たちはそれにいかに応答するのか。器用な即答はなくとも、自身に問い続けるきっかけは、その場でいくつも生まれたのだと思う。

CAPS 所蔵資料紹介

アジア太平洋センター（CAPS）資料室には、洋書 9200 冊・和書 2600 冊が所蔵されているほか、点数は限られていますが学術誌を中心とした定期刊行物や、映像資料も所蔵されています。そのなかから随時、一点または数点を選び、ご紹介してゆきます。今回は新着の DVD のなかからのご紹介です。



DVD 「女工哀歌」 姉の高校進学を機に、出稼ぎを決めたジャスミン。生まれて初めて汽車に乗り、2日間かけて町に出て、裁縫工場へ。そこでは朝8時から時には深夜までの労働が続き、遅刻は一分ごとに罰金が科される。残業代も法定の最低賃金も出ず、数ヶ月間休みもない。長時間労働のあいまに、洗濯等最低限の身の回りの雑用を大急ぎでこなすばかりの毎日だ。女工たちの平均年齢は15歳。働いて家族を支えていることに誇りを持ち、明るく逞しい彼女たちの姿には救われる思いだが、グローバル経済の闇はとてつもなく深い。

DVD 「誰も知らない基地のこと」 何と米軍は700以上の軍事基地や軍事施設を130の国に置いており、25万人以上の米兵がそこに駐留している。かつての帝国を構成しているのは植民地だが、いまやアメリカ帝国を構成しているのは軍事基地なのだ。…米軍基地を追い、カメラはインド洋のディエゴ・ガルシア、沖縄の普天間に向かう。維持することを自己目的化し、ひたすら膨らみ続ける軍産複合体の実態を知るにつけ、新たな基地建設を止めさせるために座り込みを続ける沖縄の人々の姿は、何とまっとうなものに見えることだろう。



—アジア太平洋研究センター（CAPS）資料室をご利用下さい—

利用方法については電話やEメールでお問い合わせ下さい。センターHPでも確認できます。

【利用時間】 ■月～金曜日 9時30分から16時30分 / ■土曜日 9時30分から11時30分

パイロットプロジェクト紹介

「子ども観の社会史的考察のための基礎研究」

法学部教授 湯山 トミ子

本プロジェクトは、子ども観の社会史的研究のための基礎研究として、日中の子ども観について比較考察し、東アジア儒教文化圏における子ども観の多様性、多層性を明らかにすることを目的に構想されたものである。将来的には、グローバルな子ども観の社会史的考察を構築する基礎研究として位置づけることを目指している。

子ども観の社会史研究は、これまでのところ、研究方法、対象とも子ども観研究発祥の地、西洋を中心に発達し、現在は、地理的、文化的、歴史的な視点を統合した総合的な欧米史が生み出されるに至っている（ヒュー・カンニガム 1995、2005）¹⁾。しかし、非ヨーロッパ地域については、研究対象が断片的であり、考察方法、分析視点、成果の蓄積も未だ十分でない。そのため、然るべき研究展開により、非ヨーロッパ地域、特に、西欧に対するアジアの「不在」を補う研究成果が求められている。

本研究は、こうした先行研究の状況に立ち、アジアにおける子ども観の社会史的考察を補う一歩として、日中の比較研究を行おうとするものである。欧米中心の研究に対してアジアを対象とする研究枠組みは、項目上は簡単に定立できる。しかし、一口にアジアといっても対象領域は広く、不確定で、歴史的な展開も一様ではない。儒教文化圏と言われる日中韓東アジア三カ国だけをとっても歴史的、文化的な関係が入りくみ、子どもをめぐる社会環境も異質性と相似性が複層し、多層性を内包している。そのため、本研究では、アジアにおける子ども観の社会史的研究の基盤づくりの一端として、これまで筆者が行ってきた子ども観研究²⁾、絵画を活用した研究³⁾をベースに日本との比較考察を目指す。具体的には、日中双方の子ども観の相違を明示する視覚素材として、絵画資料、特に中国からの影響が指摘される日本の江戸期の浮世絵における「子ども絵」と、その源泉となった中国の年画、及びその前身である唐宋以降の嬰戯図の基本的特徴の異相性、相似性について比較考察を行う予定である。

子どもを描いた江戸期の浮世絵は、1980年代以降、日本における子ども観研究の進展とともに

注目され、資料収集、考察が進められてきた。中国の年画との初歩的な比較研究の視点も提起されているが、年画の前身となる唐宋以来の嬰戯図に遡り、かつ絵画表現の根底に流れる子ども観にまで下りたって分析、考察した仔細な研究は、現在のところまだ見られない。そのため、本研究の考察成果は、子ども観の社会史的研究はもとより、日中の絵画資料の比較、浮世絵における「子ども絵」研究に対しても少なからぬ意義を生み出せるものと期待できる。

考察にあたっては、先行する欧米の研究法を取り入れるとともに、原罪説をもつプロテスタントイイズムにおける子ども観を反映したオランダの絵画資料、並びに日本、中国とともに東アジア儒教文化圏を構成する韓国の資料などもきるかぎり視野に入れ、考察、分析の充実をはかっていく予定である。

パイロット研究プロジェクトであるため、研究期間が一年と短い。そのため、全体の究活動は、3か月単位の4期に分けて行っていく計画である。現在はちょうど第一期（4月～6月）の基本分析期にあたる。これまでに刊行された資料、インターネット等入手できる資料を対象に、筆者のこれまでの子ども観研究で蓄積してきた考察視点に立ち³⁾、整理分析し、今後の考察のための土台作りを行っている。第2期は、夏季休暇期間にあたるため、未入手の資料を台湾、中国の故宫博物院図書館等で収集する予定である。その後、秋季から冬季にかけて、収集した資料の考察、分析を深め、年明けの第4期（2016年1月～3月）には、一年間の研究成果をまとめる予定である。一年間の短い期間ながら従来行われていない領域の研究課題である点から見て、グローバルな子ども観の社会史的研究の展開の一端となるアジアにおける子ども観研究、子どもをめぐる絵画資料に対する比較研究など、複数の研究領域に独自の学術的成果を提出できるものと期待している。研究成果は、できる限り社会に向けて発信し、中国、アジアの子ども観研究にも寄与していきたいと考えている。

- 1) Hugh Cunningham ; 『Children and Childhood :In Western Society Since 1500』 (Person Education Limited,1995 1st, 2005 2nd、第二版訳書；北本正章訳『概説 子どもの社会史——ヨーロッパとアメリカにみる教育・福祉・国家』2013年、新曜社)
- 2) 湯山トミ子；『近代中国における子ども観の社会史

的考察：子ども・家族・社会』（2006年、科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書）ほか

- 3) 湯山トミ子；「絵画里的孩子——中国古代絵画与兒童形象初談」 ([韓国]中国史学会編『通過美術看中国歴史』 pp.228-241, 2004年) ほか

書評

窪田陽一著(写真・尾花基) 『昭和の刻印—変容する景観の記憶』(柏書房、2015年)

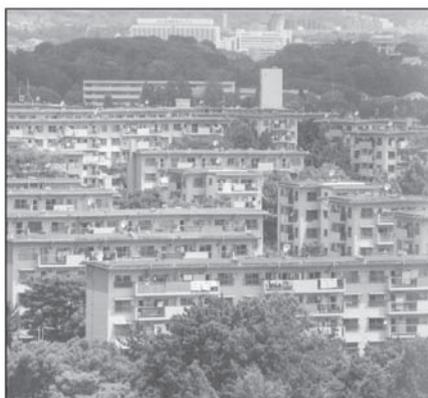
経済学部教授 扱本 佳代

「自分の心の風景はどこか」という話を親しい友人としたことがある。友人は生まれ故郷の田園風景だと言った。緑が映え、風が歌い、生命の息吹が感じられ、時の流れも忘れてしまう。そういう風景がいまの自分を育ててくれたと友人は話してくれた。

筆者の番になった。少し考えたあとで、筆者が友人に話したのは、幼い頃いつも遊んでいた家の前の原っぱの背景に、ニョキニョキと団地が生えてくる風景だった。埼玉県に近い東京のはずれにある原っぱと、その奥に徐々に広がっていく人工的な建物は、いかにもミスマッチだった。子供心に、雑草が生い茂る原っぱが侵されていくような感じがし、妙に不安になったのを覚えている。団地が建ち、道路の幅が広がり、線路が高架になり、人が増え、やがて原っぱはなくなった。筆者の心に刻まれた風景は、高度経済成長を着実に遂げた日本の大きな変化を直に教えてくれる風景だった。

昭和という時代は、とりわけ東京オリンピックを機に、国土開発という政策の下、様々な景観を作り上げていった。本書が取り上げる、今では日本の生活にあって当たり前のもので存在している超高層ビル、高速道路、地下鉄や地下街、空港、海底トンネルも、もとは昭和の産物である。平成も27年目を数え、これらの産物は経年変化し、作り替えられ、誕生した頃とは似ても似つかない

ような形やデザインになっているものもある。もちろん景観も変化している。しかし、著者はそうした変化の中にも昭和が刻印されており、それは景観の中に記憶として残っていると説く。「過去は現在の中に沈潜している。過去から見れば現代は未来だった」からだ。



昭和の刻印
変容する景観の記憶

「都」「住」「軌」「路」「渡」「辺」「天」。七つの景の中に残る昭和の刻印を著者は求めていく。たとえば「軌之景」。軌を意味する「軌」の景観には、地下鉄、新幹線、モノレールが走る。山深い盆地の真下に掘られたトンネルから新幹線が飛び出してくる。富士山を背景に新幹線が橋梁の上を走り去る。連続した高架橋を通る区間が多いのも新幹線の特徴だという。「天之景」には、天を突き刺すかのような東京タワーなどの電波塔、送電鉄塔、空港がある。景観を損ねると不評な送電鉄塔は地中化されつつあるが、新たに無線通信に不可欠な中継施設が作られ、「空

の輪郭」を変えている。

「昭和に生まれた自分の胸中では、昭和はまだ終わっていないような気が今でもしてならない。尾を引くように反芻を繰り返す思いの数々は、昭和が果たすべきだった役割が、未だ完遂されていないということなのではないか。……昭和の刻印は未来を手繰り寄せた時代の証しであるはずだ」。

戦争を経験し、日本人はより良い生活を希求し

て未来図を描き、憧れの未来を手に入れてきた。経済発展に裏打ちされた急激な開発によって作られた景観は、今日から見れば、急ぐあまり、将来を見据えた綿密な都市計画がなされなかったのではないかと疑いたくなるようなものもあることは否めない。しかし、やがてそうした景観が変容しようとも、そこには著者がいう通り、日本人が懸命に未来を手繰り寄せてきた精神の記憶が刻み込まれているのである。その記憶を踏まえ、私たちは次の未来図を描いていかなければならないのだろう。より良い生活とはどのようなものなのか。たとえそれが昭和の時代に描いた未来図とは正反対のものであったとしても、それを恐れてはいけない。何が必要で、何か不必要なのか。私たちはじっくり考えなければならぬ時に来ている。

本書の特徴として、著者が自らの経験と重ね合わせるようにして、精緻に7つの景の中に昭和を求めていくことに加え、それを象徴する景観を多数の見事な写真で見せてくれていることも忘れてはならない。写真を見ているだけでも、そこに現在に至るまでの日本人の物語が浮かび上がってくるかのようだ。

『写真論』の中で「写真の企図のもっとも雄大な成果は、私たちが全世界を映像のアンソロジーとして頭の中に入れられるという感覚をもつようになったということである」と述べたのはスーザン・ソントグだが、私たちはこれらの写真を通して、日本にいまなお残されている昭和の刻印をアンソロジーとして、確かに実感することができる。

CAPS 研究員 研究内容紹介

原爆文学と沖縄文学

CAPS 特別研究員 村上 陽子

私は日本近現代文学を専攻し、主として原爆文学と沖縄文学と原爆文学の分析を進めている。なぜ原爆と沖縄に着目するのか、という質問をしばしば受ける。

原爆文学は広島と長崎に落とされた原爆がもたらした破壊や、被爆者の戦後の生の痛みを根ざすかたちで、沖縄文学は沖縄の苛酷な近現代と言語的な葛藤、差別、沖縄戦、米軍占領や基地の問題を織りこんで生成されてきた。いずれも破壊的な出来事の記憶を色濃く宿す文学ではあるが、その背景にある歴史や文化、文脈は大きく異なっている。特に沖縄戦、広島原爆、長崎原爆というそれぞれの出来事は、全貌を知ることすら困難である上に、一回性を有する、ほかと比較しがたい体験であった。また、沖縄戦においても、広島原爆、長崎原爆においても、個々の体験の多様さや差異は枚挙に暇がないほどである。

原爆文学と沖縄文学は、それぞれ異なる出来事から生み出され、勢いを増してきた大きな渦のようなものだ。二つの渦がぶつかれば、お互いに弾きあわずにはいられない。しかし渦と渦のせめぎあい、周縁を漂う新たな流れを作るかもしれない。そのようなかすかな希望を抱いて、私は二つの領域を行き来しつつ、しかし一つの文脈に回収することのないように留意して、研究を進めてき

た。

無論、徹底的に破壊された土地において、出来事を生き延びた人々の中から生み出された原爆文学と沖縄文学の問題意識には、少なからず重なりあう部分もある。出来事をありのままに書こうとする努力や語りきれないものへの直面、その出来事を引き起こした国家の責任を問うこと、体験を持たない者に出来事を伝えようとする試みなどは、原爆文学と沖縄文学の双方が向き合ってきた問題の一部だと言える。

また、原爆文学と沖縄文学は、時に称揚され、時に消費されながら、ともに日本文学の周縁に位置づけられてきた。それでもなお、原爆文学の書き手たち、沖縄文学の書き手たちは戦後日本に生き、日本語を解する人々に向けた表現を模索しつづけてきたのだ。原爆文学と沖縄文学の双方を論じることは、戦争の記憶の分有や当事者性の問題を考えると同時に、戦後日本のあり方を問い直すことにもつながると考えている。

文学作品は想像することを通して創造される言葉であるがゆえに、歴史学や社会学などの実証的研究からはこぼれおちてしまいがちな、語られない記憶や痛みを内包している。さらに抑圧されてきたために証言を遺すことがかなわなかった存在も、文学作品の細部に声なき声を響かせている。

文学作品を通して考察を進めていくことで、沖縄戦、米軍占領、広島原爆、長崎原爆という出来事はより重層的な文脈に開かれていくはずである。そしてそれは、記憶や体験が受け渡される極めて小さな、しかし複数の回路を示して、国家の原理や大きな物語に回収されることへの抵抗につながっていくのではないかと思われる。

このような問題意識に基づいたこれまでの研究成果は、『出来事の残響——原爆文学と沖縄文学』（インパクト出版会、2015年7月）にまとめた。本書は第一部「原爆を書く・被爆を生きる」、第二部「占領下沖縄・声なき声の在処」、第三部「到来する記憶・再来する出来事」、第四部「いま・ここにある死者たちとともに」の四部構成となっており、1950年代から1990年代までの原爆文学、沖縄文学の諸作品を論じている。第一部で注目した大田洋子と、第二部で扱った大城立裕、長堂英吉、嶋津与志はいずれも米軍占領を体験し、その

暴力性や矛盾を強く意識していた。第一部、第二部では軍事占領に伴う分断や痛みに向きあい、それをもたらしたアメリカや戦後日本の問題について考察した。第三部では林京子と井上光晴の作品を取り上げた。林は少女の頃に原爆を体験し、井上は非当事者として原爆や原発の問題をくりかえし描いてきた。そして、第四部で扱った又吉栄喜と目取真俊はともに戦後生まれである。体験を書く言葉を事後的に獲得する書き手、非当事者として出来事に向き合う書き手が登場してくる時代において、出来事の記憶やその分有はあらためて大きな問題となった。第三部、第四部では個々の作品を通して登場人物が出来事の残響に共振する瞬間を拾い上げ、記憶や痛みが受け渡される回路を見出すことを試みた。本書を通して、ここで取り上げた作品が新たな読者を獲得し、原爆文学と沖縄文学という言葉の渦が勢いを増していくことを願ってやまない。

2015年度CAPS新メンバー紹介

今年度のアジア太平洋研究センター（CAPS）では、李静和所長のもと、昨年度に引き続き所属されている4人の所員の方々に加え、新たに山本真基所員に加わって頂きました。また、新たに2名の特別研究員、3名の客員研究員をお迎えしました。新しい所員、研究員の方々に寄せて頂いた自己紹介文を掲載いたします。

新メンバーとともに思いも新たに、さらに充実した活動を続けて行きたいと思っております。



[左から、溯史彦所員、
挾本佳代所員、
李静和所長、
山本真基所員、
遠藤不比人所員、
田浪亜央江主任研究員]

【山本真基 理工学部所員】

私の専門は、「理論計算機科学」と呼ばれるコンピュータサイエンスの基礎を研究する理論分野です。特に、アルゴリズムの設計と解析がメインテーマです。この理論分野は、米国や欧州を中心に様々な国で活発に研究され、研究者どうしの交流も盛んに行われている研究分野です。

所員に任命されたという機会を生かして、自分の専門分野に限らず、成蹊大学における自然科学分野の研究の推進に貢献していきたいと思っています。また、産学連携を通じて、基礎理論を応用するという形で社会へ還元できたらとも考えています。

【長谷川明香 特別研究員】

私の専門は言語学で、「英語・日本語を使ってある状況を言語化しようとする際に自然な言い方は何か」「それを分析する適切な枠組みは何か」ということに興味をもって研究してまいりました。

このセンターにいらっしゃる方々や、お手伝いしている CAPS プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として—」を通して知り合う方々から、多くのことを吸収し研究に繋げていけたらと思っています。

【村上陽子 特別研究員】

私の専門は日本近現代文学で、沖縄の戦後文学と原爆文学を主な研究対象としています。戦争の記憶が文学にどのように描かれているかを辿り、当事者性を越えて出来事を受け渡していく可能性を探ることを試みています。今後はこのような関心のもと、沖縄、広島、長崎の文学に留まらず、アジア・太平洋地域における日本語文学を読み進めていきたいと思っています。

CAPSの研究活動に少しでも貢献できるように、精進してまいります。

【川端健嗣 客員研究員】

この度、文学部・社会調査士課程室での勤務に加え、客員研究員として務めることになりました。何よりもこのような研究の場をご共有させていただけることに心よりありがたく思っております。

私は社会学の研究分野でリスクと社会的不平等をテーマとした研究を行っております。国境を超えるリスクに着目しつつ、本研究所ではとくにライフコースとリスクの関係性を評価する理論的枠組の構築から研究を進めて参りたいと思います。

【姜信子 客員研究員】

読む書く歌う旅をする。もう半世紀もそんな日々を生きてきて、その始まりは、生の記憶を語ることなく去っていった者たちの「声」、いわば「空白」からの呼び声でした。

そして今、「読む書く」は「聴く語る」へと次第に移り変わり、境を越えて旅する「語り」の遊芸者たちと共に企みを胸に旅する日々。説経、祭文、瞽女唄、浪曲、パンソリ等々、「声」の深みにどっぷりはまり、「物語り」の新境地を切り拓くべくジタバタとしています。

【富田武 客員研究員】

CAPSとのお付き合いは30年近くになりますが、私がシベリア抑留研究を始めてから、2013年6月の国際シンポジウムや『私はシベリアの捕虜だった』上映会などでお世話になり、来る8月8日のワークショップにも御協力いただいています。

戦後70年の今年、日本の近現代史を根本的に問い直す好機であり、抑留問題は植民地支配や戦後補償の契機をはらんだ重要な手がかりを提供しています。研究の第一線に立つ者の責任を痛感する今日このごろです。

アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告 (2015.3.16 ~ 2015.6.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

- ◇ 4月25日(土) センタープロジェクト海外出張 (5月11日まで)
出張者: 文学部教授 石 剛
調査地: 中国
目的: 研究資料調査及び、海外在住の研究協力者と研究会を開催するため
- ◇ 4月29日(水) センタープロジェクト海外出張 (5月6日まで)
出張者: 文学部准教授 小林 英里
調査地: 英国
目的: シンポジウム 'Lost Children' に参加し、大英図書館で同会議に関連した Black British に関する資料を閲覧するため
- ◇ 5月24日(日) センタープロジェクト国内出張 (5月24日まで)
出張者: 文学部教授 森 雄一
調査地: 大阪
目的: シンポジウム出席のため

- ◇ 5月21日(木) 第4回ドキュメンタリー映画『ガザに生きる』上映会、講演会
講演者: 土井 敏邦監督
参加者: 180名

2014年度運営委員会・所員会議開催の記録

- 4月24日(金) 第1回所員会議
- 5月15日(金) 第1回運営委員会

CAPS Newsletter No.127

2015年7月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>